



↑訪問団を心から歓迎してくれたレセプションで

若し科学者や研究者で活気がいっぱいです。ここでは約九百人の人が働いており、経済研究部、印度チベット医学部、物理学部と分れています。大きな課題の中には、バイカルの動、植物の保存研究などで、これはシベリヤ森林にも大きな意味を持つものだと思います。その他、民話や音楽、絵の研究、プリヤートの天然資源の研究などもあり、特に力を入れているのがバーム鉄道(新しいシベリヤ鉄道)建設の問題だということです。次に菓子工場を訪れ、ヤート全土に配られると

めて、紀行文としてみました。私たちが見学したのは木工コンビナートや鉄橋コンビナートの他土俗博物館、市立病院、科学アカデミー、大学、キャンプ場などでしたが、みんなが新しい国づくり、町づくりに働いていることが、ひしひしと伝わってきました。▽七月一日 私たちは午前九時ごろハバロフスクをプロペラ機で出発、ウラン・ウデ市までは三時間ちょっとの時間を要し、午前十一時過ぎに到着しました。ウ市の執行委員会副議長のアレクセイエフ氏の出迎えを受け、迎賓館へ入りました。早速、第一日目の予定である市役所を訪問、ウペーエフ市長に対し「本年留萌市は開基百年を迎えましたので、ぜひ来留してください。」と申し上げましたが、ウ市長も「いろいろ多忙であり、委員会にはかつて連絡したい」とのことでした。

途中にはコルホーズ(国营農場)があり、ノンビリと牛を追う人や軒先で憩う老人を見かけましたがその生活は厳しいものだろうなと想像されました。また、時々見かける車はソ連製で一台七千ルーブル(約二百八十万円)で、最近、自家用が多くなったようですが、まだまだぜいたく品です。給料は平均すると六万円から八万円程というから、いかに高いものか……。

さらにウ市の第十四中学校を訪れました。ソ連の学校は六月いっぱい夏休みに入り、九月一日の新学期まで、生徒は誰もいないと



バイカル湖畔で網の手入れをする漁夫 一見すると渡網のようでもある

6回目のウラン・

姉妹の友

スタッフを聞くに院長一名、副院長四名、その他医師六十三名、看護婦五百三十名、その他の職員が約三百名で、医師は本年末には二百五十名になるとのことでした。入院患者は無料で診療を受け、入院期間中は賃金の七十五から百の支給があるそうです。留萌の市立病院と比べ、国がすべて行なうのですから、赤字経営などと頭を痛めることもなく、うらやましいことと思えました。続いて科学アカデミー支部を訪れました。

この後、ウ市農業大学を見学しましたが、学生数三千二百名の他コルホーズなどで通信教育を受けている人が二千五百人程いるとのことでした。教員が三百四十人で四十五講座の他、科学研究室でコルホーズの人びとが実習の勉強にきているとのことでした。学生は国から奨学金の支給を受け宿舎に入ることができます。在学年数は五年で、修士課程はその後三年ということでした。大学の敷地面積は十二ヘクタあり、農場が二千ヘクタあり、野菜の栽培羊、馬、牛の飼育を研究、この大学はソ連邦極東では最大の大学なのだそうでした。

→お菓子工場を視察、機械的に流るれ作業で製品化が進む



この学校では、生徒数が千三百人で四十一学級、先生が六十三名一学級三十名ということ、日本とは比較にならない環境、条件はうらやましいなと思いました。義務教育は十年で、四年生からは子供の将来の進路によって職業科の勉強もあるようです。十年間の勉強で優等生には、金の勲章が与えられるのだそう、本年は四名の該当者がいたそうです。また、スポーツも盛んでプール、スポーツホールなどが完備され、また廊下は日本の学校の二倍も広く、草花が鉢植されています。一週間の授業は三十時間で、先生の授業をするのは十八時間とのことでした。

ウデ市訪問記

好深のく

ウラン・ウデ市と留萌市が姉妹都市の縁結びをしてから六回目の代表団として私たち三名が、さる七月一日から一週間、より姉妹の友情を深めるための訪問をいたしました。訪問中は、ウペーエフ市長を始め、多くの市民の方から歓迎を受け、ウ市の福祉活動や教育などの施設をつぶさに見学させていただきましたが、その感想等も含

この日のうちに、私たちはバイカル湖に向けて出発することになったので、約四時間の車の旅をすることになるわけです。バイカルまでの道路は未舗装部分が多く思いましたが、両側は原生林が密生し、日本人にとってはうらやましい景観でした。また、動物は熊、鹿、黒テンなどが多くのことでした。



また、ウ市には人口三十一万人大学内で約二万人の大学生、十八の専門学校、五十四の中学校があります。病院は二十あり、四千人の人が入院可能で、医療費はすべて無料であるとのことでした。土俗博物館では、丸太の家や生活器具、衣類などが展示され、小平町の花田番屋を思い起しました。▽七月四日 二カ月前に完成した病院の視察で、ここには、外科を中心に十科あり、病室、面会場、手術室などを拝見しました。

留萌市と姉妹都市であるソ連ウラン・ウデ市を、さる六月三十日から七月七日まで、第六次の留萌市代表団が親善訪問しました。今回ウ市を訪問したのは、塩谷洋次氏(行政代表)岸 明氏(経済代表)阿部清晴氏(文化関係代表)の三氏です。三氏は原田市長からの親書をたずさえ、また、ウペーエフ市長へ開基百年記念の紹待などとともに、両市のより友情の絆を深めてこられました。では、姉妹都市ウラン・ウデ市訪問記を塩谷氏にレポートしていただきますのでご紹介いたします。

早速、第一日目の予定である市役所を訪問、ウペーエフ市長に対し「本年留萌市は開基百年を迎えましたので、ぜひ来留してください。」と申し上げましたが、ウ市長も「いろいろ多忙であり、委員会にはかつて連絡したい」とのことでした。

民族の祭典

ト民族の祭典、土俗博物館を見学。私たちの訪問日程を併せて開催された民族の祭典は、数万人の人でにぎわっていました。プリヤートにはモンゴル系の人たちを主に三十六の民族があり、今日は歌と踊りの祭典だといえます。レスリングや弓、競馬、重量あげ、民族衣装のあでやかさは、鮮やかなものでした。



↑ウペーエフ・ウ市長に原田市長からの親書を手渡す塩谷団長

途中にはコルホーズ(国营農場)があり、ノンビリと牛を追う人や軒先で憩う老人を見かけましたがその生活は厳しいものだろうなと想像されました。また、時々見かける車はソ連製で一台七千ルーブル(約二百八十万円)で、最近、自家用が多くなったようですが、まだまだぜいたく品です。給料は平均すると六万円から八万円程というから、いかに高いものか……。

民族の祭典、土俗博物館を見学。私たちの訪問日程を併せて開催された民族の祭典は、数万人の人でにぎわっていました。プリヤートにはモンゴル系の人たちを主に三十六の民族があり、今日は歌と踊りの祭典だといえます。レスリングや弓、競馬、重量あげ、民族衣装のあでやかさは、鮮やかなものでした。



↓木材工場で働く女工さんたち